



センバツに向けて作品を仕上げた履正社担当の石田瞳さん(左)と明石商を担当し今春卒業した大野詩織さん(同部提供)



作品を仕上げる書道部員たち(同部提供)



今春センバツ幻のプラカード担当  
**兵庫 芦屋書道部も「甲子園」喜ぶ**

兵庫・芦屋の書道部が10日、甲子園での交流試合実施を喜んだ。昨年の国際高校生選抜書展(書の甲子園)団体の部で近畿地区を制し、今春のセンバツでプラカードの文字を担当する予定だった。

履正社(大阪)を書き上げていた石田瞳さん(3年)は、元阪神関本賢太郎氏(41)の長男で同校の勇輔主将と西宮市の夙川小で同学年だった。報道を受け試合ができるようになって本当に良かった。自分が書

いたものは使われるか分かりませんが、選手の活躍を楽しみにしています」。同校は他に大阪桐蔭、明石商(兵庫)が割り当てられ、部員22人から選考した。作品が完成後に中止が決まり、大阪桐蔭担当の原愛美

さん(3年)は「楽しみにしていた人もいたので悔しかった」と振り返った。石田さんは、字を通してエールを送っていた球児たちが救われ、「確実に世の中は前に進んでいると感じました」と、ほっとした様子だった。【松本航】

センバツのプラカードで履正社を担当した石田瞳さん(後列右から2人目)、大阪桐蔭を担当した原愛美さん(同右)ら芦屋高書道部3年生。後列左端は顧問の狩谷申子さん(撮影・松本航)

芦屋市立第一中学校は再建を断念して全従業員

「夢」を叶えたい